

佑啓

ゆうけい

発行者

社会福祉法人 佑啓会

理事長 里見 吉英

〒290-0265

千葉県市原市今富 1110 - 1

TEL 0436-36-7611

FAX 0436-36-7612

編集者 広報委員会

青年よ〇〇を抱け

富岡 将訓

私は一つのことをじつくりと考えて作り上げていくことを好んできた。何事もスピーディーに事が進んでいく佑啓会においては無謀なスタイルなのは明白だが、仕事においても自分が納得しながら一歩一歩事を進めることを長く当たり前にしてきた。

佑啓会にお世話になることになった四年前から現在、そしてこの職に就くことになった経緯を振り返ってみよう。そして、自身の紹介も兼ね外様でしか感じられない率直な気持ちを書き留めよう。



言い方は古いがレトロな喫茶店が好きである。集中し考え込みたいときには好きな空気を求めては店を探し彷徨っている。お気に入りの喫茶店が軒並み店をたたんでしまった上に、相変わらず続くコロナ禍。なかなか落ち着ける場所がみつからないのが残念であるが、某チェーン店の居酒屋でした。と佑啓の原稿を考えることとした。

久しぶりに酒場の暖簾をくぐったら驚いた。ここまでするかというくらい感染予防策が講じられているうえに、細かな配慮をしてくれる従業員。閑散とした店内の一番奥の個室にひとり籠もり、定番のとりあえず生。コーヒーマッ

紙機関のだが、ジョッキ片手も悪くはない。

私が佑啓会に入職したのは平成二十九年四月一日。それまでは旧身体障害者療護施設が前身の障害者支援施設で二〇年間勤務していた。若いがゆえに浮つく私の心を見透かし、仕事に集中できるような様々な現場経験の機会をいただいていたことには感謝の気持ちしかない。

地域の相談窓口となる在宅支援センターの立ち上げ。まだインターネットで簡単に情報を得られる時代ではなかった。障害者が気軽に相談できる場を作りたいと、

市の障害福祉課に毎日顔を出しては担当者や雑談しつつ情報を集めた。さらには「困りごとは何でも相談に乗ります」というチラシを置かせてほしいと、病院や高齢者施設、なぜかスーパーマーケット等にも通っていた。今思うと、障害者の相談は何でも受けますなんて、とても怪しい営業活動をしていたと思う。しかし、無鉄砲なこの行動が、後の相談支援専門員として活動するための下積みとなり、多くの関係者との顔つなぎになったのは間違いない。

相談支援業務で施設外での仕事をする機会が増えてくると、自分がやりたいことをやりたいと考えだす生意気さが顔を覗かせるようになる。その頃、就労支援や児童支援等、新設されたサービスには、株式会社をはじめとした多様な事業体が参入。利用者を勧誘する動きが広まり、ビジネス化していく姿を見て違和感を覚えるようになった。とはいえ、自らも事業所を立ち上げ、児童に関わる仕事をしてみたいと思い描くようになっていた。今思えば単なる妄想、夢物語。具体的な一歩を踏み出す勇氣も資金も根性も持ち合わせていなかったアラフォー男の妄想を、ただただ傾聴してくれていた妻と長女長男。頭が下がる思いである。

そんな折、相談支援専門員の国研修で酒を酌み交わし、今後の相談支援研修のあり方、生き様や人生について語り合った松橋次長と研修の席で一緒に、思い切った自らの想いや悩みを打ち明けてみた。その結果、一歩を踏み出す勇氣を得て「佑啓会で心機一転働きたい」と決心。それからまさに電光石火。松橋次長より理事長

の予定がついたからとの連絡。少々のおびり屋の私にとって、その日は突然訪れた。

当日、私は朝から仕事を手につかなかった。里見理事長にお会いする緊張感のもとより、二〇年間お世話になった上司に報告できずにいたからだ。その後、何とかお伝えできたものの、待ち合わせの五井駅に向かったのは約束の一時間前。遅れてしまいかもしれないと一報を入れ、大急ぎで車を走らせた苦しい思い出。後々、「あの時遅刻していたら今はないだろう」と理事長より伺った。

実際に働き始めて感じたことは、外から来た人にとにかく優しく、共に働く人を大事にする気取らない雰囲気心地よさ。四十二歳の転職新人。言葉にできない救われる想いを何度も味わった。更には職員の福利厚生行事と、情報交換を兼ねた酒席の多さ。これには正直圧倒された。前職の二〇年間で重ねた回数を、たった一年足らずで更新してしまうなんて。ただ最近ではコロナ禍により自粛中。誠に残念でならない。

その酒席で、理事長は「人生は人と人との縁だ。多くの人に支えられて今の私がある」とよく話してくださる。酔えば酔うほどに同じ話を繰り返す人と幾度となく出会ってきた。しかし、それは人や社会に対する愚痴や批判めいた話となってしまうがちだ。ところが、おそらく記憶がなくなるだろう酒量でも、いつも変わらずに人生の奥深さ、人を大切にすることの大切さを説いてくださる。その言葉の重み、そしてその人間力に、皆が魅了されているのは間違いないだろう。

そのうえ、多忙なスケジュールの合間を縫っては定期的に全事業所の現場を見て回る。職員会議にも出席し、給与明細を手渡しながら職員ひとりひとり声を掛け、その声に耳を傾けている。法人の幹部職員も他事業所の行事や会議に顔を出しては職場の雰囲気を見てくれる。こんな大きな法人では考えられないことだと驚きしかなかった。

話は変わるが、横浜の自宅から千葉の大学まで通うつもりだった私。残念ながら学生時代に真面目に勉学に励んだ記憶はほぼゼロである。しかし、福祉職に就く原点となる経験値は多く積んできたと自負している。当時は社会福祉学を学べる大学は少なかった。よって、母校の正門に学生ボランティアを募集するために多くの車いすに乗った方々の姿があった。そう、ヘルパーをはじめ自立生活をするための公的サービスが乏しい時代であったことから、地域において自立した生活を望まれる方にとつては学生も貴重な社会資源であったのだろう。

長時間電車に揺られ、横浜まで帰ることが面倒という理由が第一なのは間違いだが、ボランティア精神もほんのひとかけら持ち合わせていたことも嘘ではない。すぐさま泊まり込みでのボランティア募集に飛びついた。あたたかい部屋と食事の恩恵を受け、ただ一緒に酒を飲んだり、旅行したりと友達のような感覚で楽しんでいたと記憶している。

当時は障害のある方がどんな暮らしをしているのか真剣に考え

たこともなく、収入が障害年金と生活保護であったことも卒業後に知ったこととなる。障害を抱えているために様々な苦労や困難があったと思うが、在宅で暮らすことを自ら選択し、人として当たり前の暮らしを歩んでいた人と少しではあっても時間を共有させていただいたことは、この仕事の礎になっている。



ふる里学舎蔵波 青年寮

この四月、福祉型障害児入所施設ふる里学舎蔵波青年寮（定員二〇名、一時保護八名）の施設長を拝命した。ただ漠然と児童に関わる仕事がしたいと思いついていた私にとって、この上ないありがたい話であり、つくづく恵まれていると思う。

二ヶ月が経過し、子供たちの成長のスピードに戸惑うこともしばしば。だからこそ、その速さに圧倒されることなく、一歩一歩着実にという姿勢が必要なのかもしれない。皆が日々健やかに成長し、立派に社会にはばたくことができるよう、精一杯務めたい。

早く個人的な趣味であるキャンプや釣り、自転車など、子供たちと一緒に楽しめる日が来ることを願いつつ。

（ふる里学舎蔵波 青年寮施設長）

地域で生きる

越川 智子

我が家が浦安で暮らし始めたのは2001年10月、娘が4歳の時。浦安には私の実家があり、子育てに両親の助けが不可欠だったこと、身体に障がいのある娘を育てる環境が浦安には整っていることなどから転居を決めました。ちょうど同年の9月にオープンしたTDS（ディズニースー）と一緒に、今年我が家は浦安在住20周年を迎えます。

娘は「筋ジストロフィー」という病気を抱えて生まれてきました。診断が確定したのは生後6か月。愛しい娘が障がいを背負い生きていかなくはならない。そして、私がその娘を育てる親であるという現実を知らされた時の衝撃。私たちの人生はこれからどうなってしまうのか……不安を抱えながらの日々が続きまし

た。幼稚園に上がるまでの娘は身体が小さく、ちょっとした風邪症状でも入院治療が必要でした。その頃通っていた療育センターでは、名前を呼ばれて「ハイ」と答えるのが精一杯。でもうれしい時に見せる笑顔は爆発的な破壊力があり、周りの人を温かい気持ちにさせる力がありました。人と関わるのが大好きな娘に、地域で友達を作ってあげたい。その一心で市の機関に働きかけ、幼稚園から小学3年生まで、学区の普通級に補助職員を配置していただき通うことができました。今思えば、集団登校の一員に車椅子で加わり通ったあの時間が、娘を地域の子どもとして認識してもらえきつかけになったのだと思います。そして大人になった今でも、多くの方が娘を見守ってくださりこの地域で安心して暮らしていられるのだと。一方娘も、徐々に自分からコミュニケーションをと

るようになり、積極性、周りをよく見て察する力、自ら考えて動く力に身についてきました。そしてその多くの経験が今の娘の生きる力につながっているのだと感じています。

障がい児と健常児と一緒に過ごすことで、子ども同士も保護者同士もさまざまなことを伝え合えます。私は娘が小さい頃に地域の子どもたちと共に過ごしたことが、とても意義のある大切な時間だったと確信しています。



お友達と一緒に記念撮影（中央）

私には記憶に残り思い出すと今でも目頭が熱くなるシーンが二つあります。その一つは幼稚園の入園式でのこと。娘が他の新入園児と並んで座り、先生の手遊びをまねて笑っていました。その嬉しそうな顔をみた時の感動は一生忘れないと思います。もう一つは、娘が成人式を迎えた少し後のこと。小学3年生まで一緒にすごした地元の友人の集まり（いわゆる飲み会）に声をかけてもらい（私も同席で）参加しました。すっかり大人に成長した同級生たちは、昔と同じように娘をごく普通に迎え入れ、いろいろな話をしながら楽しい時を過ごしました。娘にとっても私にとっても夢のような時間でした。ごく普通の何気ない場面ですが、これらは娘の病気を知った時に諦めなければならなかった景色であり、夢以外で実現することのないものだと思いますから。



懐かしのメンバーと語りあいました（右端）

娘は、生まれた時から今の自分しか知りません。誰かと比べることもなく、うらやむこともなく、自分自身をありのままに受け入れ、その中で精一杯楽しみ、学び、経験を重ねています。その娘の姿は、親の私から見ても尊敬することも多く、力強さにまぶしささえ感じます。

「赤ちゃんは親を選んで生まれてくる」と聞いたことがあります。娘が私の元に生まれてきたことにはきつと意味があるのだと思います。娘がいることで、これまで交わることのなかった多くの方と出会い、貴重な経験をjして、私自身が学ぶことも多くあります。

今、ふる里学舎浦安デイセンターで娘がお世話になっていることもその一つ。昨年の5月に佑啓会のスタッフさんとお会いし、福祉の仕事をする楽しげに働いているみなさんの姿から、私も頑張ろう！と力をもらっています。

娘だからできることはないのか、娘を育てている私たちだからできることはないのか、そんなことを探しながら、お世話になっているこの街でこれからも暮らしていきたいと思っています。

「先のことを思い煩うのではなく、すべてを受けいれ今を精一杯生きよう！」がモットーの我が家らしく！

（ふる里学舎浦安 保護者）

令和3年度

新入職員代表挨拶

笹木 優希

皆さん、おはようございます！ 僭越ながら、新入職員を代表して挨拶をさせていただきます。

ふる里学舎の里山科に配属された、笹木優希と申します。

本日は、私たちのために辞令交付式を開催していただき、誠にありがとうございます。新型コロナウイルスの蔓延に伴い、大人数での集合が叶わないご時世ではありますが、このような素晴らしい式典のもとで佑啓会の一員として迎え入れてくださいましたこと、大変嬉しく、光栄に思っております。



4月1日辞令交付式

私が佑啓会と出会ったのは、幕張で開催されていた合同企業説明会でした。

当時、法人のブースを担当されていた川口さん、川島さんと初めてお会いし、「こんな素敵な先輩方と一緒に働きたい！」と強く感じました。そこからインターンシップに参加し、Tasuku Fukushima等のイベントでは、運営側としても様々な経験をさせていただきました。

里山科、そよかぜキッズ、大塚作業所と、たくさんの方の事業所にて体験しましたが、やはり印象深いのは配属先となった里山科でのインターンシップです。

小学生以来、久しぶりに知的障害のある方々と接し、ブルーベリーの

収穫をお手伝いさせていただきました。食べ頃のブルーベリーを素早く見分けたり、自ら率先して機械を手にし草刈りをしたりする利用者の姿を見て、正直驚きました。

大学3年生から福祉を専攻していたものの、作業を経て、自分が無自覚に偏見を抱いていたのだと、気づくことができました。また、どの事業所へ訪問しても共通して感じたことは、川口さん、川島さんとお会いした時に感じたのと同じことでした。先ほど申し上げたように、インターンシップを通じて、大学3年の夏からお世話になっている佑啓会。私は、この法人で働く日が来ることを、内定をいただいております。今か今かと心待ちにしております。

3月末の研修で学んだ「福祉人である前に社会人であれ」という言葉。佑啓会の職員の方々が大切にされているこの言葉の重みを感じながら、一戦力として飛躍したいと思っています。ります。そのためにも、利用者の方々や業務を1日でも早く覚え、何事にも全力で臨んでまいります。



社会へ踏み入れたばかりの未熟者であるがゆえに、まだまだ頼りないところもあるかと思われます。しかし、利用者のため、支えてくださる職員の方々のため、また法人のために、精一杯の努力を重ね、成長してゆく所存です。先輩方におかれましては、どうか温かく見守っていただき、時には厳しくご指導くださいませう、お願い申し上げます。

以上、簡単ではございますが、私からの感謝と決意の言葉とさせていただきます。

（ふる里学舎 支援員）

家族会の皆様から

心温まるお手紙を

頂戴しました。

『職員の皆様へ』

エールと感謝の言葉

2020年初頭からの新型コロナウイルス感染症拡大により、ふる里学舎で暮らしたり、日中を過ごしたりする利用者本人たちは、今までに経験したことないような行動の制約が生じ、戸惑いながらの日々を過ごしていたことと思います。

早や一年が過ぎましたが、今までの「日常」は依然として戻っていません。そのような中、親の心配をよそに、本人たちは意外にもこの「非日常」を受け入れ、ふる里学舎で落ち着いた生活を送っています。それは、本人たちを支援してくださるすべての職員の皆様の献身的な協力のおかげだと頭が下がります。

一人ひとりの家族から、このような職員の皆さまの忍耐強い取組みと心優しい見守りに対して、心から熱いエールと深い感謝の気持ちを送り届けたと思います。

新型コロナウイルス収束し、日常が戻るまで、どうか引き続き家族の想いと共に、利用者の生活を見守っていただきたいと思います。

ふる里学舎家族会

すべての家族より

編集後記

新入職員が入職し2ヶ月が過ぎました。春の訪れを感じたと思っていながら、あつという間に夏が目前に。まだまだ見通しの立たない日々が続いていますが、利用者も職員も笑顔忘れず、夏の暑さを乗り越えていきたいと初夏への意気込みを乗せながら、佑啓116号をお届け致します。

（支援員 清野 さくら）